

平成31年

喜

多

流

涌

泉

能

雷

電

高林昌司

独吟隅田川

高林白牛口二

附子

茂山七五三

実

盛

高林呻二

第八十一回

平成三十一年四月十三日(土) 一時始

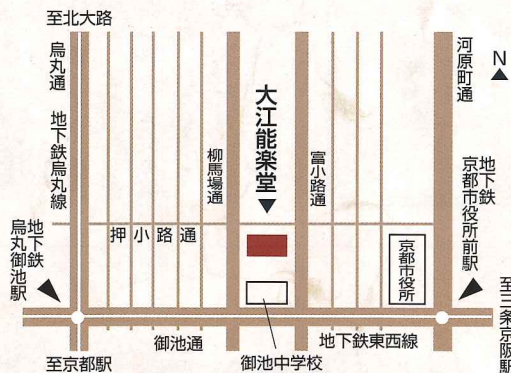
主催 高吟会

大江能楽堂

京都市中京区押小路通柳馬場東入ル 電話 075-231-7620

入場料 前売 7,000円 学生券 3,000円
当日 8,000円 全席自由席

問合せ 〒603-8354 京都市北区等持院西町15 高吟会
電話075-462-1490 FAX.075-463-3494
E-mail koginkai@ares.eonet.ne.jp
URL <http://www.eonet.ne.jp/~koginkai/>



地下鉄「烏丸御池」または「京都市役所前」下車。徒歩約10分。

動静以天地
視哉涌泉美
鈿之翁

涌泉能番組

高林 呻二

実

盛

大坪 賢明
江崎 欽次朗
河村 大
和田 英基
成田 達志
中田 弘美
網谷 正美
森田 保美

附

子

茂山 七五三
網谷 正美
山宗 彦

休憩二十分

隅田川

高林白牛口二

雷

電

高林 昌司
中村 宜成
福王 知登
谷口 正壽
廣谷 和夫
成田 奏
山下 守之
中田 一葉
貞光 智宣

受賞に思うこと

高林白牛口二

この度、法政大学より催花賞をいただきました。
この賞は、能楽三役の功労者及び能楽の普及・発展に貢献の大きい個人・団体を顕彰するために、昭和の最後の年に設定されたものです。そして平成の最期の年に私が受賞することになりました。

私の受賞の理由は『氏は多年にわたって京都の喜多流の継承に奮闘するとともに、虚飾を排した緊張感あふれる謡と演技によって、観客を魅了してきた。能のシテを引退した後も、独吟謡を通じて喜多流の古風な芸格を今に伝える氏の存在は、昨今の能楽界にあつてますます貴重なものとなっている。』とあり、また主な経歴の記事の中でも『能のシテとしては平成二十六年四月の喜多能楽堂での（江口）を最後に引退。同年六月より「高林白牛口二の謡を聴く会」を開催するなど、近年はもっぱら謡の分野で活躍を続けている。』と書かれています。

これは私が謡う謡を、評価されたものと思います。まだ僅か六回しか開催していないにも拘わらず、このように評価されるという事は、ある意味では我が意を得たりとも思いますが、また責任も重く受け止めています。

現在の能の世界では、各流を通して、謡の音楽性を失っているように思っています。喜多流の伝書として有名な悪魔払や寿福抄には、謡の大切さが随所に鑲められています。私が常に提唱している「謡は声楽である」と云う表現も、悪魔払の冒頭の文章の中に書かれています。また「正身同声」と云う語も、伝書の中の正文と云える表現で誌されています。身体を正して声を和らげて謡う謡は、聴く人の心の中に、何時までも住み続けるものと思います。

身を正しく保つことも、声を和らげるという事も、同一のことです。身を正しくするには、余分な力みを全て排除しなければなりません。声を和らげるにも、全身を、特に声の通る道筋を和らげなくてはなりません。

この心得を以て謡う時は、一曲一番、正味一時間以上を独吟で謡っても、疲れを覚えることはありません。自分自身でも不思議に感じているのですが、曲が進むに従って、どんどんとエネルギーが湧き出てくるのです。謡い終わった時の爽快さに、これ程生きていると云うことを如実に感じられることは、他には恐らく存在しないのではないかと思っています。これが今日現在の私の心境です。

これからも「百年前の謡本を見て百年前の謡を謡う」をモットーに、私は命の限り続けて行こうと思っています。

次回予告

二〇一九年十一月九日（土）

於 大江能楽堂

一曲独吟 鬼界島

高林白牛口二

龍田

高林昌司

主催

高吟会

許可なく写真撮影録音録画は、堅くお断り致します。携帯電話 ポケットベル 時計のアラームは、予めお切り下さい。